

# 基本的な考え方【自然災害対応編】

## ●災害による被害を理解する

日本は、自然的条件から各種の災害が発生しやすい特性があり、毎年のように水害（風水害・土砂災害）（以下、水害とよぶ）、地震・津波等の自然災害が発生しています。2011年（平成23年）の東日本大震災や2016年（平成28年）の熊本地震、2018年の平成30年7月豪雨、令和元年においても房総半島台風や東日本台風により大規模な被害を受けました。そのほか、火山の噴火、大雪などが発生しています。

これらの自然災害は過去に起こった情報をもとに、自治体では、予測した内容を地図に示した「ハザードマップ」を作成して公表しています。このマップには、水害の浸水予測範囲、土砂災害の発生が想定される場所、地震の揺れの大きさ、津波が浸水する範囲、火山噴火に伴う火砕流や降灰の範囲などが示されています。

### （児童館でできること）

- ①自治体が公表している災害ごとの「ハザードマップ」を入手する
- ②児童館においてどのような被害が想定されるのか、確認する
- ③想定被害に応じて、児童館の対応を職員同士で話し合う

## ●あらかじめ避難するタイミングを考えておく

水害、大雪、津波などは、気象観測などをもとにある程度予測ができます。テレビニュースなどで紹介されている気象情報などを参考にして、児童館での対応を判断することが求められます。

### （児童館でできること）

- ①災害に関する情報入手の手段を決める（インターネットのニュースサイト・ラジオ・テレビ等）
- ②避難するタイミングを決める
- ③具体的な避難先や避難ルートを検討する

参考：避難の理解力向上キャンペーン実施中!!（内閣府防災情報のページ）

警戒レベル	新たな避難情報等		これまでの避難情報等
5	 災害発生 又は切迫	きんきゅうあんぜんかくほ <b>緊急安全確保</b> ※1	災害発生情報 (発生を確認したときに発令)
~~~~~<警戒レベル4までに必ず避難!>~~~~~			
4	 災害の おそれ高い	ひなんしじ <b>避難指示</b> ※2	・避難指示(緊急) ・避難勧告
3	 災害の おそれあり	こうれいしゃとうひなん <b>高齢者等避難</b> ※3	避難準備・ 高齢者等避難開始
2	 気象状況悪化	大雨・洪水・高潮注意報 (気象庁)	大雨・洪水・高潮注意報 (気象庁)
1	 今後気象状況 悪化のおそれ	早期注意情報 (気象庁)	早期注意情報 (気象庁)

※1 市町村が災害の状況を確実に把握できるものではない等の理由から、警戒レベル5は必ず発令される情報ではありません。

※2 避難指示は、これまでの避難勧告のタイミングで発令されることになります。

※3 警戒レベル3は、高齢者等以外の人も必要に応じ普段の行動を見合わせ始めたり、避難の準備をしたり、危険を感じたら自主的に避難するタイミングです。

# 基本的な考え方【自然災害対応編】続き

## ●災害発生からの経過

①災害発生直後	②災害発生から3日間(72時間)程度	③災害発生3日から2ヶ月程度	④災害発生から2ヶ月以降
自然災害の発生したとき、まずは命を守る行動がなにより大事になります。水害などの場合は、安全な場所に避難すること(安全な場合は移動しないこと)、地震の場合は、怪我をしないように身を守る行動をとります。	子どもたち、職員の命と安全を確保する時期です。被害によって身の回りは大きく変わることがありますが、子どもたちを保護者に受け渡したり、職員自体も安全な場所で過ごすこととなります。	被災した地域の住まいに大きな被害があった場合は、避難所での暮らしや被害のあった家屋での生活を送ることになります。児童館の被害の度合いによって、児童館自体が使えなくなることとなります。	避難所が解消したり、応急仮設住宅など仮の住まいが建てられるようになります。元ある暮らしを取り戻していくために、地域住民や関係機関と協力して、子どもたちのケアや復興を進めていきます。

## ●フェーズにあわせた児童館活動

このように災害発生から、時間の経過とともに子どもたちの置かれる状況も変化します。児童館では、こういった状況にあわせた対応を考える必要があります。

災害による被害によって、一時的にも児童館が利用できないときや、子どもたちの生活に変化が生じるようなときには、「子どもの遊びや居場所を取り戻すこと」を考える必要があります。

「災害で大変なときに」と思われることもあるでしょうが、災害による混乱や暮らしの変化の中で、子どもたちへの配慮は忘れられがちで、取り残されやすい状況に置かれます。児童館ガイドラインでは、「児童館は、子どもが、その置かれている環境や状況に関わりなく、自由に来館して過ごすことができる児童福祉施設」とあります。災害時に置かれている環境や状況に関わりなく、「子どもたちが安心して遊ぶことができる場所」を提供することを考える必要があるのではないのでしょうか。

児童館が無事であれば、子どもたちを迎え入れるようにしますし、被害によって児童館が使えなくても、子どもたちが遊べる場所や遊ぶ道具を提供することができます。普段から子どもの遊びと居場所を提供している児童館だからこそできることと言えます。

災害から元の暮らしのようになるまでには時間を要します。元ある暮らしに戻れた人がいる一方で、戻れないままの人もいるようなことも起こりえます。そういった中でも、被災した人や子どもに配慮して、安心して過ごせる場を提供することも考える必要があります。

## ●平時からの備え、検討の必要性

災害の被害などは実際に起きてみないとわからないこともたくさんありますが、ハザードマップや過去の災害での対応などを参考に、災害後の対応をイメージすることはできます。

時間の変化とともにどういった児童館活動ができるのか、そのためにどういった準備をしておくかよいのかを考えておくことができれば、災害時に少しでも落ち着いて対処できるように思います。

そして、これらの対応を考える上では、自治体の防災・危機管理担当部署や地域で実践している自主防災組織、または災害救援や防災を専門とするNPOなどに相談するのがよいでしょう。あわせて、児童館職員同士と一緒に話し合うことが欠かせません。利用する子どもたちへの啓発などとセットにして、災害時の対応を考えていくことが望ましいです。

## ●大事にすべきポイント

### ①日頃からの児童館同士、児童館以外のつながりをいかす

災害時には、児童館職員だけで対応するには限界があります。災害発生直後は限られた人たちでの対応になりますが時間の経過とともに、他の児童館職員や、地域の住民、学校や子育て支援機関などと協力しあって、子どもたちの遊びと居場所づくりを考えていく必要があります。日頃からのつながりがあれば、協力をお願いしたり、相談しやすくなります。

### ②児童館の特徴や強みをいかす

児童館の立地条件、利用する子どもたちの年齢層、実施しているプログラム内容などは、児童館によって特徴は様々です。また、日頃から力を入れている取組・強みといえることもあります。こういった状況を客観的に整理しながら、災害時に「できること」、「やったほうがよいこと」などを考えるとよいでしょう。災害前と同じような状況をすぐに取り戻すことはできなくても、まずは始めること、少し時間が経ってから取り組むことなど、優先順位を考える際に役立つはずです。

### ③子どもたちと一緒に取り組む

災害時、子どもたちへの配慮は忘れられがちで、取り残されやすい状況にあると書きました。まずは子どもたちがどういった状況にあるのか知ることが大事です。そして、子どもたちの意見を尊重しながら、徐々に子どもたち自らの力で遊び、生活することをサポートしていく視点を忘れてはなりません。一緒に災害を乗り越える、一緒に遊びや居場所を取り戻すという姿勢が、なにより子どもたちの成長にもつながるといえるのではないのでしょうか。

## 児童館ガイドラインより関連内容の抜粋

### （第4章 児童館の活動内容、3 子どもが意見を述べる場の提供）

- (1) 児童館は、子どもの年齢及び発達の程度に応じて子どもの意見が尊重されるように努めること。
- (2) 児童館の活動や地域の行事に子どもが参加して自由に意見を述べるができるようにすること。
- (4) 子どもの自発的活動を継続的に支援し、子どもの視点や意見が児童館の運営や地域の活動に生かせるように努めること。

### （第7章 子どもの安全対策・衛生管理 4 防災・防犯対策）

- (1) 災害や犯罪の発生時に適切な対応ができるよう、防災・防犯に関する計画やマニュアルを策定し、施設・設備や地域環境の安全点検、職員並びに関係機関が保有する安全確保に関する情報の共有等に努めること。
- (4) 災害発生時には、児童館が地域の避難所となることも考えられるため、必要な物品等を備えるように努めること。

### （第8章 家庭・学校・地域との連携、3 地域及び関係機関等との連携）

- (3) 子どもの安全の確保、福祉的な課題の支援のため、日頃より警察、消防署、民生委員・児童委員、主任児童委員、母親クラブ、各種ボランティア団体等地域の子どもたちの安全と福祉的な課題に対応する社会資源との連携を深めておくこと。

# モデル事業の概要【自然災害対応編】

モデル事業の実施にあたっては、本事業の調査研究委員会委員からの助言をもとに、3つの地域で実施しました。

モデル事業の実施にあたっては、想定する災害や被災経験の有無などを踏まえて候補となる地域を検討し、それぞれ該当する地域から選出しました。

加えて、平成30年7月豪雨で大きな被害のあった岡山県倉敷市での対応についてもヒアリングを行い、コラムとしてまとめています。

## 地震災害・風水害両方を想定

都道府県 市区町村	児童館名	事業名／プログラム概要
宮城県 仙台市	仙台市八本松児童館	<b>【いざ!に備える親子防災プロジェクト】</b> 子ども、保護者向けの多様な防災プログラムの実施を通じた災害時の児童館の役割検討
兵庫県 神戸市	魚崎児童館	<b>【防災プログラムと災害対応を考えるワークショップ】</b> 乳幼児世帯向けと、災害の種類にあわせた児童館の対応を考える職員を対象にしたワークショップの実施

## 風水害の被災経験有

都道府県 市区町村	児童館名	事業名／プログラム概要
愛媛県 松山市 西予市	えひめこどもの城／ 西予市野村児童館	<b>【とり+かえっこinのむら2021】</b> 被災した子どもなどを対象にしたおもちゃかえっこプログラム

## 【コラム】被災地での子どもの居場所・遊び場づくり

岡山県倉敷市の真備児童館他市内の職員を対象に、平成30年7月豪雨時の児童館職員の対応に関するヒアリング

# いざ!に備える 親子防災プロジェクト

## こんな事業

2011年東日本大震災当時、八本松児童館は乳幼児親子の避難所となりました。それから10年が経過し、転入者も多く、当時を知る人は少なくなり、小学4年生以下は震災を体験していない世代となっています。3年前から、平時から緊急時・災害時における児童館の役割を利用者とともに考えようと、防災ダンボールキャンプをはじめとした防災イベントを実施しています。

今年は、乳幼児から小学生の親子を対象に、第1部は「デイキャンプ」として、避難所のファミリースペース見学や車いす体験などのフィールドワークをおこない、第2部は防災クイズの他、実際に避難所に宿泊体験をする「宿泊キャンプ」をおこないました。

それぞれデイキャンプ7組、宿泊キャンプ6組の親子が参加し、「堅苦しくなく、子どもと一緒に色々体験できて良い経験になりました」などの感想が聞かれました。



## どうやって?



<p>広 報</p>	<p>児童館の公式SNS(ブログ、Instagram、Facebook)で配信、報道各社へのプレスリリース</p>
<p>プログラムの内容</p>	<p>●親子向け防災キャンプ  <b>【第1部】デイキャンプ(乳幼児～小学生の親子対象)</b>  13:15～ 参加者受付  13:30～ 事業開始・挨拶・事業説明  13:45～ 地域避難所運営の方からの講話(東日本大震災の際の対応等)  14:15～ 遊戯室内にテント設営・ファミリースペース見学  15:00～ フィールドワーク  ・親子防災クイズ  ・車椅子を使って、公園を回ってみよう  ・リアカーを使って、物を運んでみよう  ・マッチで火起こし体験  16:00～ アルファ米・水の配布、解散</p> <p><b>【第2部】宿泊キャンプ(小学生以上の親子対象)</b></p> <p>17:45～ 参加者受付  18:00～ 事業開始・挨拶・事業説明・防災クイズ  19:00～ 寝床づくり</p> <p><b>1日目</b> 20:00～ マッチで火起こし体験  20:45～ 就寝準備  21:00～ 就寝  22:00～ 完全消灯</p> <p><b>2日目</b> 6:30～ 起床・寝床を片付け  7:00～ ラジオ体操・朝の散策  7:30～ 朝食配布(アルファ米・水の配布)、解散</p>
<p>協力体制</p>	<p>①仙台市より、ダンボールベッド2台の貸与  ②太白区より、備蓄品(アルファ米・水)の提供  ③太白区社会福祉協議会より、車椅子2台と職員の派遣  ④八本松地区町内会 避難所運営委員会より防災講話  ⑤仙台市立郡山中学校より、ファミリーテント4台の借用とボランティアの派遣  ⑥リッキーアカデミー(放課後等デイサービス)より職員の派遣、防災クイズの実施</p>
<p>スタッフ</p>	<p>児童館職員:7名/関係機関職員:4名/町内会関係者:3名/  郡山中学校ボランティア:8名/学生ボランティア:2名</p>

## ポイント解説



## 1 日常的に児童館とつながりがある組織・団体などの協力を得て実施

- 八本松児童館では、日頃から地域の自治会の会合に参加し、役員の方と顔見知りになっていたことから、今回のプログラムを実施するにあたっても協力が得られやすくなっていた。郡山中学校とは日常的なやりとりもあり、資機材の貸与だけではなく、児童館を利用したことがある中学生にもボランティアとして参加していただいた。
- 災害時には、隣接する市民センターが避難所になるため、子どもたちや子育て世帯のために、児童館を開放することも念頭においている。このようなつながりは、災害時にも有効に機能するものと言える。

## 2 毎年継続して実施することで、防災知識の更新、発展

- 八本松児童館の館長は、東日本大震災当時、別の地域の児童福祉施設で被災した経験がある。当時の経験を伝えるためにも、継続的に防災のプログラムを実施している。自身の経験をもとに、他の児童館で実施されているプログラムなどを参考に企画されている。
- これらの取組は、災害時の児童館の果たす役割を、職員などに理解してもらうためにも大事な機会になっている。



### 調査研究委員からのコメント

#### 人が集まる、協力しあう開かれた児童館

災害時には、様々な人たちの協力や支え合いが欠かせません。この事業にはいろいろな人たち、いろいろな世代が参加しており、魅力的なプログラムと言えます。小学生を対象にしたプログラムに、小学生の頃に児童館を利用していた中学生が、ボランティア参加していたのが印象的でした。

災害時には、様々な人たちの助け合い、協力で乗り越えていく必要があります。八本松児童館は、地域から協力してもらえただけの存在ではなく、地域のために協力できることを考えていることが確認できました。

このような関係は、児童館が「人が集まる、協力しあう開かれた場」であることを意識して、日々運営しているからこそできたと言えるのではないのでしょうか。

富川万美(NPO法人ママプラグ理事)

## 保護者の感想

- 避難所での子どもの過ごし方について難しさを痛感しました。周りに知らない方がたくさんいるなかで、子どもにおとなしく!と言ってもなかなか聞いてくれないだろうし、もしそういう状況になったら大変だろうなという事が今回のプログラムで想像する事ができ、貴重な体験になりました。
- 自分達は大丈夫だろうと思っている人は多いと思いますし、私もその1人です。子どもがうるさく、落ち着きも無いので、正直災害があっても避難所を利用する事は出来ないだろうと思いました。周りに気を使って自分が疲れてしまうからです。それに犬もいるので避難所は難しいと感じました。ただ、被害にあった方々のお手伝いをする事は可能だとも思いました。
- 体験型で何をするにもワクワクして取り組む子どもたちを見ただけでも大満足でした。帰る途中で息子が「今日は楽しかったけど地震きたらああいうところで寝るの、嫌だなあ」と子どもなりに災害を考えるきっかけになったんだなあと思いました。いざという時に心強いサポーターがいてくれる安心感と、積極的にこういう取り組みをしていただいている児童館がある環境で子育てできる事に感謝です。

## 職員の感想

- 災害時に子どもの遊び、癒やし、学びのための場として機能できたらよい。大人が前を向けるように子どもが元気になってもらうのが児童館の役割なのではないか。
- これからも東日本大震災の経験・教訓などを子どもたちにバトンをつなぐ機会をつくっていきたい。
- 地域にはいろいろな資源があるので、こういったプログラムを通じて、災害時のことを意識して地域を知る機会をつくるのが大事だと思う。プログラムを実施するにあたっては地域のニーズにあわせることも意識する必要がある。
- 日常的に地域の様々な関係機関、団体と相互協力できるフラットな関係性をつくり、フレンドリーな児童館でありたい。

## 児童館の紹介

はちほんまつ

### 仙台市八本松児童館

運営主体：特定非営利活動法人みやぎ・せんたい子どもの丘

職員数：11名

所在地：宮城県仙台市太白区八本松2-4-20

利用者数：親子10組程度

児童館種別：小型児童館

(1日あたり)

プログラム：<http://hachihonmatsu.jugem.jp/>

Instagram：<https://www.instagram.com/hatihonmatujidoukan/?hl=ja>

Facebook：<https://ja-jp.facebook.com/hatihonmatujidoukan/>

# 防災プログラムと 災害対応を考えるワークショップ

## こんな事業

1995年(平成7年)に発生した阪神・淡路大震災の経験から、神戸市の児童館では防災・減災のための取組が継続的に行われています。

魚崎児童館では、これまで地域住民等と連携した取組をおこなってきましたが、新型コロナウイルス感染症対策のため、最小人数で実施することとしました。実施したプログラムは、乳幼児世帯向けのワークショップと、災害の種類にあわせた児童館の対応を考える職員を対象にしたワークショップを行いました。

第1部では、乳幼児世帯を対象に、備蓄品や非常持ち出し袋を考えるワークショップを実施し、23組の親子が参加しました。



広 報

児童館のホームページ(じどうかんだより)、チラシ配布



プログラムの  
概要

### 【第1部】乳幼児親子向けワークショップ(90分)

～その時 わが子を守れますか～

乳幼児世帯を対象に、備蓄品や非常持ち出し袋を考え、親子で防災リュックづくりをする。実施を通じて、子育て世帯同士の交流の機会とする。

・講師：子育てママのNPO(ミラクルウィッシュ)

備 品

職員が企画し、施設にあるものを使用

非常持ち出し袋に入れられるグッズは、100円ショップから調達

プログラムの概要

【第2部】災害時の児童館の役割を考えるワークショップ

～児童館が被災したら どうする?～

○プログラム概要

- (1)ワークショップのねらい(15分)
- (2)想定される児童館の被害確認(30分)
- (3)災害時の児童館の取組検討(30分)
- (4)全体でのふりかえり(15分)

※魚崎児童館のほか、神戸市東灘区内2つの児童館職員が参加

実施結果

※第2部の結果についてまとめました。

(1) 想定される児童館の被害確認

神戸市が公表しているハザードマップを参考に児童館ごとの想定される被害を紹介

相談者	想定される被害
魚崎児童館	・風水害・土砂災害：特になし ・地震・津波：震度6弱のゆれ、津波被害はないが、近隣海岸部は浸水
田中児童館	・風水害・土砂災害：特になし ・地震・津波：震度6弱のゆれ、近隣の津波の心配もない
洞森台児童館	・風水害・土砂災害：内水氾濫による浸水想定区域 ・地震・津波：震度6弱のゆれ、津波0.3-1.0m
本庄学童 保育コーナー	・風水害・土砂災害：土砂災害警戒区域 ・地震・津波：震度5強のゆれ、近隣の津波の心配もない

(2) 災害時の児童館の取組検討

災害時に、子どもの遊びや居場所を取り戻すために、2つのパターンからそれぞれ児童館の役割を検討しました。(下記は検討した項目)

ケースA :児童館が被災し、子どもたちの自宅も被災した場合

→児童館ではないところで、子どもたちに提供できることを考える

- 例
- ①「遊び」「居場所」を提供するために持ち出すもの(乳幼児、未就学児、小学生(学童クラブ)等のそれぞれのためにあるとよいもの)
  - ②児童館の運営再開のために持ち出すもの(子どもたちへの連絡、児童館活動のために必要なもの)
  - ③被災した児童館の代わりに使える場所

ケースB :児童館は無事でも、子どもたちの自宅は被災した場合

→児童館や地域の施設を使って、子どもたちに提供できることを考える

- 例
- ①「遊び」「居場所」を提供するために持ち出すもの(乳幼児、未就学児、小学生(学童クラブ)等のそれぞれのためにあるとよいもの)
  - ②被災した子どもたちのために、児童館以外で活動できる場所

## 検討結果

- ボール、なわとび、レジャーシート、カードゲーム、お絵かきぬりえ、ダンス用の小型スピーカーなど遊びの備蓄袋をつくる(これまで廃棄する予定のものを保管)。
- 活字が読みたくなる子ども向けに本も少しだけ準備する。
- グループわけなどに使えるように養生テープもあるとよい。
- 子どもの引き渡しのためのカードや災害時に貼り出すための用紙と筆記用具などが必要。
- 児童館は被災者を受け入れる可能性もあるので、近隣の公園や施設など遊べるスペースも考えておく。落ち着いたら、紙芝居やお絵かき、折り紙などができるとよい。

ワークショップ実施後、魚崎児童館の職員が話し合って、「おもちゃ持ち出し袋」を準備しました。内容などは下記のとおりです。

### 【おもちゃ持ち出し袋の内容一覧】

内容	数量
ぬりえ	3
トランプ	4
UNO	1
けん玉	2
お手玉	4
パズル	2
立体パズル	1

内容	数量
折紙	数セット
折紙の本	1
縄跳び	2
お絵かき用紙	何枚か
筆記用具 (鉛筆・消しゴム・ハサミ)	一式
色鉛筆	3
ミニ将棋	1



## ポイント解説



### 災害を具体的にイメージ

- ワークショップでは、神戸市が公表している風水害・地震・津波ハザードマップをもとに、それぞれ参加した児童館で想定される被害(リスク)を確認した。土砂災害の被害、津波親水の被害が想定される児童館や、被害はないものの、近隣の被災者などが避難することが想定される児童館もあった。具体的な被害のイメージから、災害時の児童館がこういった対応をすべきなのか具体的に考える機会になった。
- また、ワークショップを通じて、児童館での子どもの受け入れ、もしくは被災した子どもたち向けに出張児童館などができるように持ち出しキットを検討することになった。

## ポイント解説



### 日常から職員の意識啓発

- 魚崎児童館は、道路挟んで向かいに小学校があり、災害時には避難所になることが想定されている。そのため、児童館と地域住民等が連携した取組を展開している。
- 館長は、児童館が開館している時間帯に災害が発生した場合にどういった対応をすべきなのか、職員に対して問いかけをしている。この問いかけによって、利用している子どもの安全の確保、保護者との受け渡しなど具体的な対応を職員が考えることにつながっている。

### 調査研究委員からのコメント

#### 非常時であっても継承していく震災の経験

例年であれば、小中学校や地域と連携した防災プログラムを実施している魚崎児童館、コロナ禍という非常時に防災プログラムを実施する、という二重の意味での「非常時」プログラムとなった。地元兵庫のNPOを活用したり、プログラムをパッケージ化して市内の他児童館でも実施するなどの工夫が随所に見られた。いつもの行っていたプログラムができなくても「少しでも震災の経験を次世代に継承していくんだ!」という児童館スタッフの強い意志を感じた。

第2部の児童館職員を対象としたワークショップ「災害時の児童館の活動を考える」は、各地どこの児童館でも実践できる内容で、第1部と同じくぜひパッケージ化して各地の児童館で実践いただきたい内容でした。児童館職員の災害対応力の向上に必ずプラスとなることと思います。ぜひ実践を!

大角玲子(神戸市総合児童センター(こべっこランド) 運営課長)

### 児童館の紹介

#### うおざき 魚崎児童館

運営主体：社会福祉法人神戸市社会福祉協議会

職員数：21名

所在地：兵庫県神戸市東灘区魚崎中町4-3-16

利用者数：150名(1日あたり)

児童館種別：小型児童館

ホームページ：<http://www.eonet.ne.jp/~uozaki-jidokan/>

# とり+かえっこ in のむら 2021

## こんな事業

2018年の平成30年7月豪雨で被災した際、地域の子どもたちを支援するプログラムとして「とり+かえっこ」\*を始めました。職員は被災した子を把握していたため、その子たちがおもちゃを持ち帰れるように配慮しました。

去年は感染症が拡大する中で実施できなかつたため、2年の間にたくさんのおもちゃが集まり、今回過去最多のおもちゃを用意することができました。スタッフとなってお仕事をするのも子どもたちに人気があります。

被災後すぐに実施した前回は、100人近くの参加がありましたが、今年はコロナの影響もあり小学生11人、幼児11人、保護者9人の合計31人の参加でした。



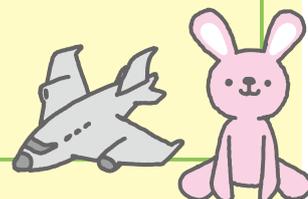
### ※「とり+かえっこ」とは？

使わなくなったおもちゃの交換を中心にした「子どものまち」です。おもちゃのリユースをきっかけとして、子ども同士のコミュニケーションを図り主体的な活動を促します。また、こどもたち自身が考えた“お店”を出したり、実行委員会を結成して運営に積極的に参画したりすることで、子どもたち自身で遊びを創造する体験もできます。

これは、全国でおこなわれている「かえっこ」の児童館版として国立総合児童センターこどもの城が開発したものです。

#### （あそび方）

- ① 家から使わなくなったおもちゃを持ってくる。
- ② かえっこバンクで持ってきたおもちゃを子どもに査定してもらい、カエルポイントに変える。
- ③ ポイントを使ってお買い物をする。スタッフになってお仕事をしたり、ゲームに参加したりしてポイントをためる。
- ④ ポイントを使ってオークションに参加する。



# どうやって?



<p>広 報</p>	<p>ホームページに「じどうかんだより(イベントスケジュール)」を掲載、チラシ掲示</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>		
<p>プログラムの内容</p>	<p>事前準備</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; border-right: 1px solid black; padding: 5px;">                 10:00 小学生スタッフ集合、 イベント準備開始 11:50 イベント準備終了             </td> <td style="width: 50%; padding: 5px;">                 13:00 「とりにかえっこ」イベント開始 15:00 オークション 15:30 イベント終了             </td> </tr> </table>	10:00 小学生スタッフ集合、 イベント準備開始 11:50 イベント準備終了	13:00 「とりにかえっこ」イベント開始 15:00 オークション 15:30 イベント終了
10:00 小学生スタッフ集合、 イベント準備開始 11:50 イベント準備終了	13:00 「とりにかえっこ」イベント開始 15:00 オークション 15:30 イベント終了		
<p>協力体制</p>	<p>えひめこどもの城、地域住民よりおもちゃの寄贈</p>		
<p>準備物</p>	<p>机、おもちゃを入れるかごなど、施設にあるものを使用</p>		
<p>スタッフ</p>	<p>児童館職員:3名/子どもスタッフ:何名でも可※規模により異なる</p>		

## 野村児童館の被災状況

- 平成30年7月7日に被災し、臨時休館していた。
- 児童館職員も遠方に在住しており、当時野村地区までの道路が土砂崩れで寸断され、遠回りをして、児童館に駆け付けた。
- 児童館内は停電3日間、1週間断水により、児童館の再開は難しく、臨時休館。
- 7月21日より野村幼稚園のホールを間借りして児童館活動を再開。
- 12月末、元の場所にて児童館を開館。



## ポイント解説

### 平成30年7月豪雨時、えひめこどもの城の対応

- 災害直後は、県内の児童館と情報共有のためのメーリングリストを活用して、状況把握を行った。
- 被災した地域の児童館には、電話をかけて、児童館職員の勤務状態、被災状況等を確認し、必要物品、消毒、片付け道具などを調達し持参した。
- 愛媛県と相談し、えひめこどもの城所有のバス(のちに人数が増えてバスをチャーター)を活用して、被災地の子どもたち(未就学児は親同伴、小学生・中学生)をこどもの城で受け入れる。
- 7月29日～8月末まで6回実施。当初2回程度を想定していたが、申し込み数が多かったため回数も増やした。
- 少し落ち着いたら、被災した児童館に相談しながら、おたのしみイベントなどを提供した。メーリングリストを活用し、他の児童館職員にも現地でのサポートを呼びかけた。

### 調査研究委員からのコメント

#### 機動力のある大型児童館だからできること

えひめこどもの城(大型児童館)では、日頃から県内の児童館と連絡を密にしており、普段から連携を取りやすい関係性を築いており、それを活かしてすみやかに災害支援につなげることができました。

被災当初は日常を取り戻すお手伝いでしたが、少し落ち着いてくると子どもたちの遊びの支援が必要になりました。子どもたちが参画して作り上げ、運営する面白さや、持って帰って遊ぶおもちゃを手に入れた子どもの笑顔から、気持ちガリフレッシュできていたように感じました。窮屈な災害時の生活の中でホッとできる時間や場所になったのではないのでしょうか。

地域に根差す児童館では、被災した地域や子どもたちの置かれている状況を知り、さりげない支援が求められます。機動力のある大型児童館と、日頃からの地域とのつながり、子どもたちの関係がある小型児童館や児童センターが力を合わせると、より広がりのある支援が可能になります。

上木秀美(えひめこどもの城 事業企画チームリーダー、全国児童厚生員研究協議会 副会長)

#### 児童館同士の相互支援の仕組みに期待

豪雨災害により、学校や幼稚園・保育園が浸水被害を受けると休みになります。自宅が被災する、あるいは自宅近所の公園等も被災すると、子どもの居場所や遊び場がなくなります。他方、被災した保護者は、被災した自宅の片付け作業や、被災に伴う事務手続きに追われ、作業や事務手続きの間の子どもの預け先のニーズが高まります。

児童館は、地域における子どもの大切な居場所ですが、児童館も被災すると、児童館の再開に向け職員は片付け等の作業に追われます。えひめこどもの城の取り組みは、被災した野村児童館を、大型児童館がサポートした事例であり、子どもの居場所づくりに貢献したことは、参加申込者数が多かった点からも伺えます。災害に備え、このような児童館同士の相互支援の仕組みを今後日本全国で構築していく必要があります。

阪本真由美(兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科教授)

## 参加者・保護者の感想

### (子ども)

- 今日はね、輪投げの担当するんよ。でも本当はあれ(おもちゃの査定:高学年担当)がやりたい。
- おもちゃはいらないけど、スタッフがやりたい。
- 普段は児童クラブに行くから児童館にはこない。今日はお友達がいるから来ました。

### (保護者)

- 久しぶりの再会があって嬉しかったです。このイベントを待ちわびていました。
- 去年できなかった分、おもちゃは家にダンボール2箱用意していました。
- 小学生になり、ずっとやりたかったスタッフができて喜んでいました。幼いきょうだいがあるのでお兄ちゃんに目が届かず、この場は助かってます。

## 職員の感想

- 待ち望んで参加してくれた子が多かった。
- スタッフをした子も自分の意見が形になると嬉しそう。最後は「私がやったんだよ」と、達成感を語っていた。
- 元々えひめこどもの城でやっていたイベントであったためグッズも揃っており、すぐにできるイベントだった。
- 家が浸水してしまった子に、「これあるんやけど、使う?」と言って「とり+かえっこ」とは別におもちゃを用意して渡した。気に入って持って帰ってもらい、良かったと思う。
- 今後も継続したい。回数を重ねることで、「とり+かえっこ」を知っている子がだんだん増え、大きくなったらスタッフしようかなと言ってくれる子も増えると嬉しい。

## 児童館の紹介

のむら

### 野村児童館

運営主体：西予市	職員数：5名
所在地：愛媛県西予市野村町野村11-35-1	利用者数：20名(1日あたり)
児童館種別：小型児童館	
ホームページ： <a href="https://www.city.seiyo.ehime.jp/kakuka/nomura_sisho/seikatsu_fukushi/jidoukan/index.html">https://www.city.seiyo.ehime.jp/kakuka/nomura_sisho/seikatsu_fukushi/jidoukan/index.html</a>	

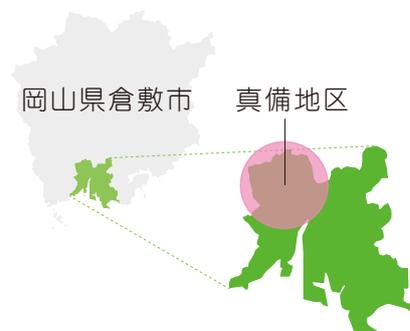
### えひめこどもの城

運営主体：伊予鉄総合企画株式会社	職員数：約65名
所在地：愛媛県松山市西野町乙108番地1	利用者数：平均約658名 (1日あたり)
児童館種別：大型児童館	
ホームページ： <a href="https://www.i-kodomo.jp/">https://www.i-kodomo.jp/</a>	
Instagram： <a href="https://www.instagram.com/ehimekodomonoshiro/">https://www.instagram.com/ehimekodomonoshiro/</a>	
Facebook： <a href="https://www.facebook.com/1434747143255710/">https://www.facebook.com/1434747143255710/</a>	

コラム

# 真備児童館「被災地での 子どもの居場所、遊び場づくり」

2018年(平成30年)6月28日から7月8日にかけて、西日本を中心に北海道や中部地方を含む全国的に広い範囲で発生した「平成30年7月豪雨」により、岡山県倉敷市真備地区は大きな被害を受けました。高梁川水系小田川では町内の堤防が決壊し、推定浸水深が最大で約5mに達するなど、学校、病院等が浸水、真備児童館も屋根まで水没してしまいました。



## 被災後の対応

いつ	何を	どうなった
2018年(平成30年) 7月7～8日	倉敷市の子育て支援課と協議	全市で対応するため、被災していない児童館も含め、全6の児童館・児童センターを7月末まで閉館
7月11日～16日	市要請により、全職員が被災地の支援に入る	<ul style="list-style-type: none"> <li>●4か所の避難所を手分けして巡回。ニーズのあった2つの避難所で、空き教室や避難所の隅を借りて、子どもの遊び場を開設</li> <li>●おもちゃ類、扇風機、自分の弁当等を持参</li> </ul>
7月12～31日	二万幼稚園にて子どもの遊び場を実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>●平日9～16時</li> <li>●延べ628人が利用</li> </ul>
7月13～31日	他の2つの幼稚園で子どもの遊び場を実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>●平日9～16時</li> <li>●岡田幼稚園で延べ483人、園幼稚園で延べ561人が利用</li> </ul>
8月～31日	5館の児童館再開。週1日児童館を閉め、支援場所での子どもの遊び場を実施	保護者が自宅の片付けに行っている間、幼児を預かるといったニーズに変化
10月1日	仮拠点で真備児童館を再開	<ul style="list-style-type: none"> <li>●倉敷市真備支所内の会議室を借用</li> <li>●狭いため、乳幼児に配慮して小中学生が遊びにくかった(後日、別スペースに卓球台を設置)</li> </ul>
2020(令和2)年 3月22日	真備児童館再開	元の場所で再開

## 被災した子どもたちの支援

### （被災直後の対応）

- 被災後すぐに、全市で対応するため、倉敷市内の児童館は閉館して、被災した地域の避難所で子どもの遊びの支援をすることになりました。
- 子どもの遊び場のニーズが無い避難所もあり、平等に支援できないことが悩ましい状況でした。
- 避難所だけではなく、幼稚園も使うようになり、施設の職員が中心となってPRをしてくださったほか、市のホームページにも掲載してもらいました。
- おもちゃなどの備品は、職員が児童館から支援場所へ持ち寄りました。また幼稚園で支援を行った所では、幼稚園のおもちゃも借りて遊びを提供していました。

### （8月以降の対応）

- 8月に入った頃から、幼児（3～5歳）が中心になりました。保護者が自宅の片付けに行っている間、幼児を預かって子どもたちの心が癒されるような遊びを職員が考えて支援しました。
- 日が経つにつれて、地域の方の支援が多くなると共に、夏休みに入ったことで、他地域の幼稚園や保育園の先生の支援が入るなど、段々と支援の手が増えていきました。
- ボランティアや幼稚園の保護者が、子どもたちの遊び場に協力してくださり、中高生は子どもたちと一緒に遊んでくれました。
- 使用した施設は、クーラーが無い所が多く、熱中症のことにも配慮して、扇風機を持ち寄って対応しました。
- 被災の有無に関わらず、できるだけどの子どもも同じように接するように、こちらから問い詰めることのないように、日々職員でも相談しながら対応しました。

### （復旧に向けて）

- 10月1日から倉敷市真備支所内の会議室を仮拠点として児童館を再開しました。
- これまでの児童館に比べると狭く、小さい子がメインで遊ぶと、大きい子が遠慮して遊びにくい状況になりました。
- そこで、共有スペースを利用して卓球台を貸してもらえることになり、小・中学生が来て楽しむようになったほか、施設のテラスに人工芝を敷き、遊べるスペースが確保できたことで、子どもたちがより遊びやすくなりました。
- 被災前から、市内の児童館では「出前キッズ号」という出張児童館を実施していました。従来は職員の自家用車を使用していたが、被災後、倉敷市民からの寄付によって専用車両「お出かけ児童館号」が各児童館に1台ずつ配置され、2018年（平成30年）11月「おでかけ児童館」として再開しています。



## 職員からのメッセージ

- 初めて被災地に入った時は、安否確認をしている状況で、遊びの支援に行くには早すぎるのでは？との意見が大半だったため、私たちも不安がありました。結果的に、訪問したところには子どもたちが生活していて、児童館職員として関わることができてよかったと思っています。
- 日頃から倉敷市の全6児童館で情報交換や応援の体制があり、小学校や中学校とも繋がりがあったので早い時期から連携することができました。自治体や地域の関係者、団体から災害時も支援していただくことができたと思います。
- 普段から未来を見据えた児童館の役割を発信して、地域とのつながりやネットワークを作っておくことが私たちの務めであると思っています。困難にもみんなの手を借りて対応することができます。
- 今回は、幼稚園などでの活動ができましたが、あらためて被災時にこういったところで子どもたちの遊び場・居場所を提供できるのかは、考えておく必要があるのではないのでしょうか。

## 調査研究委員からのコメント

### 災害時に重要となる遊びの支援ができる児童厚生員の専門性

倉敷市真備地区では、西日本豪雨災害直後から市内児童館職員によって遊びの支援が展開されました。災害前からあったネットワークが活かされたのです。児童厚生員のみなさんは、命が優先のときに遊びの支援に行くことに葛藤があったそうです。しかし、「児童館の先生がいてくれたから安心して子どもを預けることができました」「たくさん遊んで、楽しかった!という子どもの笑顔があったからこそ生き延びることができました」という保護者の声からは、災害直後からの遊び支援の重要性をひしひしと感じます。災害派遣福祉チーム(DWAT)において子ども支援の専門職として想定されているのは保育士です。しかし、真備児童館のヒアリングからは、0-18才までをトータルに遊びで支えることのできる児童厚生員の専門性が極めて重要であることが明らかとなりました。

安部芳絵(工学院大学 基礎・教養部門 准教授、  
厚生労働省社会保障審議会児童部会 放課後児童対策に関する専門委員会  
遊びのプログラム等に関する専門委員会 専門委員)

参考：一般財団法人 児童健全育成推進財団

「平成30年西日本豪雨災害 被災地における児童館職員による遊び場づくり検証報告書」

<https://www.jidoukan.or.jp/info/news/84695a8bb925>

## 児童館の紹介

### まび 真備児童館

運営主体：社会福祉法人 倉敷市総合福祉事業団

職員数：5名

所在地：岡山県倉敷市真備町有井1556-2

利用者数：110名(1日あたり)

児童館種別：小型児童館

ホームページ：<https://kgwc.or.jp/mabiji/>

ブログ：<https://kgwc.or.jp/mabiji/category/blog>

Instagram：<https://www.instagram.com/mabijidoukan/>

# 緊急下の子どもたちのためのケア 「子どもたちのための心理的応急処置」

(Psychological First Aid for Children:子どもたちのためのPFA)

地震や事故などの危機的な出来事に直面した子どもたちは、普段とは異なる反応や行動を示すことがあります。

「子どもたちのための心理的応急処置(子どもたちのためのPFA)」は、そのような子どもたちのことを傷つけずに対応するための方法です。

\*子どもたちのためのPFAは、世界保健機関(WHO)などが支援者が共通して身につけておくべき心構えと対応をまとめたPFAを、子どもとその保護者・養育者に対して実施するうえで、子どもの発達段階の特性や、年齢にあった必要など、子どもに特化して、セーブ・ザ・チルドレンが作成したものです。

自然災害など危機的な出来事に直面した子どもたちが、不安を抱えたり、いつもと違った反応を示すことは自然なことです。緊急下では、泣き叫ぶ子どももいる一方、感情を全く示さなくなる子どももいます。反応は子どもによってさまざまですが、共通して言えるのは安定した大人がそばにいたことが大切だということ。子どもたちが少しずつ、自分たちのペースで落ち着きを戻せるよう、「子どもたちのための心理的応急処置 (Psychological First Aid for Children:子どもたちのためのPFA)の方法でサポートしてください。

**準備 Preparation**  「見る・聴く・つなぐ」を効果的に行い、自分の安全を守るための準備

- 危機的な出来事について調べる。• その場で利用できるサービスや支援を調べる。
- 安全と治安状況について調べる。

見る Look



- 1 安全確認を行う**
  - 自分の身の安全を確認する。
  - 周囲の危険に注意する。
- 2 明らかに緊急の対応を必要としている子どもがいいるか探す**
  - 重傷を負い、緊急医療を必要としている子どもやその家族はいないか?
  - 水や食べ物、衣類の替え、避難場所などを必要としている子どもはいないか?
  - 虐待や暴力などの危険にさらされていると思われる子どもはいないか?
- 3 深刻なストレスを抱えている子どもがいいるか確認する**
  - 特別な支援を必要とする子どもはいないか?
  - 普段と様子が違う子どもはいないか?

聴 Listen



- 1 支援が必要と思われる子どもに寄り添う**
  - 優しく穏やかに話しかけ、自己紹介する。
  - 視線が子どもと同じ高さになるように身をかがめたり、しゃがむ。
  - 子どもが話したいときに話せるような安心・安全な環境をつくる。
- 2 子どものニーズや気がかりなことについて尋ねる**
  - 何が必要で、何が心配かを確認する。
  - できることを一緒に考えるなど手助けをし、子どもが自ら問題に対処できるように支える。
- 3 子どもの話に耳を傾け、気持ちを落ち着かせる手助けをする**
  - 子どもやその家族に寄り添う。
  - 話すことを無理強いない。
  - 起きた出来事について子どもやその家族が話したい場合は、耳を傾ける。

つなぐ Link



- 基本的なニーズが満たされ、適切な支援が受けられるようサポートする
- 子どもを、大切な人や社会からの支援につなぐ
- 安全の確保、衣・食・住・基本的な医療など、生きていく上で必要な基本的なニーズが満たされるよう情報を提供したり、つないだりする。
- 特に必要としているもの(例えば、アレルギー対応の離乳食など)を把握し、それが入手できる場所へつなげる。
- 子どもが家族や大切な人と離れなければならないよう支援する。
- 例えば、遊びや学びなど、子どもが必要としている特有のニーズを理解し、支援につなげる。
- 情報を提供する
  - 子どもやその家族が必要とする情報を提供する。
  - 【危機に見舞われた人が求める主な情報】
    - 基本的ニーズに関すること
    - 発生した出来事
    - 影響を受けた大切な人たちの状況
    - 自分たちの安全
    - 自分たちの権利
    - 必要な援助や物資を得る方法
- 自分で問題が対処できるよう手助けをする
  - 危機的状況下での子どものニーズは多様である。
  - 何でもしてあげるのではなく、できるだけ子どもの自助力を促す。

**専門的な支援を必要とする子ども**

生きていく上で必要な基本的なニーズが満たされ、安全、尊厳、権利が守られ、家族や地域からの支援を受けることで、多くの子どもは専門的な支援を必要とせず、再びもとの状態に自分の力で戻れるようになります。

しかし、子どもの中には、長期にわたって強いストレスを抱えていたり、日常生活に支障をきたすなど、自分だけでは対処できず、さらなる支援を必要とする子どももいます。

その際には、精神保健医療の専門機関や専門家につなげる必要があります。すぐに専門家につなげるのが難しい場合は、保健師、養護教諭、教員など、地域の人たちからさらなるサポートが受けられるようつなぐことが大切です。

## 自然災害などの影響を受けた 子どものころを支える5つのポイント

### 幼児期・学童期

- ① 可能な限り、これまで行ってきた日課を続け、規則正しいリズムを作りましょう。例えば、毎日決まった時間に起きて、食事をとる。遊ぶ時間を決めるなど。
- ② 気分をリフレッシュするために、運動や体を動かすアクティビティを行いましょう。例えば、子どもと一緒にストレッチやラジオ体操を試みるなど。
- ③ 子どもの中には、いつもよりも頻繁に抱っこを求めるなどスキンシップを必要とする子もいるかもしれません。そういう時は、子どもと一緒に手遊び歌をするなど、普段より意識することで子どもの安心につながります。
- ④ 自分のことは自分でできるということを感じてもらいましょう。例えば、2種類のおもちゃのうち、好きな方を子どもが自分で選ぶなど。どんなに小さなことでも、子ども自身が選ぶことで、子どもが物事や自分自身をコントロールしているという感覚を取り戻し、自己効力感を高めることにつながります。
- ⑤ つらい記憶を呼び起こすような物事から子どもを守ってください。気付かないうちに子どもがつらい出来事や不安、恐怖心を増幅するような映像に長くさらされている恐れがあります。意識的にテレビなどとの接触時間を減らしましょう。

### 学童期・思春期

- ① 可能な限り、これまで行ってきた日課を続け、規則正しいリズムを作りましょう。例えば、毎日決まった時間に起きて、食事をとる。学習や遊ぶ時間を決めるなど。
- ② 大人の役割を引き受けたり、普段より頑張りすぎている子どもはいませんか。子どもは年齢が高くなるにつれ、緊急時の深刻さを自身の視点からだけでなく、他者の視点からも理解できるようになり、強い責任感や罪悪感を抱くこともあります。十分な休息の時間をとれるよう、周りの大人が配慮をしてください。
- ③ この年代の子どもの特別なニーズを理解し、子どもたちが安心して過ごすことができる環境をつくりましょう。この年代の子どもは、心身ともに急激に成長するという難しい過程の渦中にいます。例えば、避難所における更衣室スペースの確保、生理用品や下着などの配布場所の配慮、自習スペースの確保や勉強支援などは、この年代の子どもの安心へつながります。
- ④ 子どもが自然に話し出したら、話に耳を傾けてください。子どもの話を遮ったり、自らの考えで子どもの話を判断したりせず、子どもの話に集中し、共感を言葉と態度で示し、落ち着けるよう手助けをしながら話を聴いてください。
- ⑤ 子どもたちの自立を支援しましょう。子どもができることは自分でやるよう促したり、どんな小さなことでも選択肢を提示することは、子どもが物事や自分自身をコントロールしているという感覚を取り戻し、自己効力感を高めることにつながります。

最後に、親や養育者など子どもの周りにいる大人は子どもにとって最も大切な人です。皆さんが普段通り子どものケアができるよう、食事や休息の時間をとり、周囲からのさまざまなサポートを活用してください。



## 災害時の子育て ～平成30年7月豪雨実体験からのヒント～

発行：2021年3月

発行：災害と子育て研究会

編集：兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科・倉敷市立短期大学  
岡山大学教育学部松多研究室、岐阜大学地震工学研究室防災  
グループ、岡田地区まちづくり推進協議会、サンサポートオカヤマ



## あかちゃんとママを守る防災ノート

発行：2016年

企画・協力：特定非営利活動法人MAMA-PLUG

監 修：春名めぐみ

(国立保健医療科学院生涯健康研究部/母子保健担当主  
任研究官産婦人科医、医学博士、公衆衛生修士)

吉田 穂波

(国立保健医療科学院生涯健康研究部/母子保健担当主  
任研究官産婦人科医、医学博士、公衆衛生修士)

企画・協力：特定非営利活動法人MAMA-PLUG

### 【事業概要】

#### 「非常時における児童館の活動に関する調査研究」

業務受託者：株式会社 ダイナックス都市環境研究所

#### 業務概要

- 調査研究委員会の設置・運営
- 非常時プログラムの企画・実施
- 非常時プログラムマニュアルの作成

#### 非常時における児童館の活動に関する調査研究委員会（敬称略、五十音順）

安部 芳 絵（工学院大学 基礎・教養部門 准教授、厚生労働省 社会保障審議会児童部会  
放課後児童対策に関する専門委員会、遊びのプログラム等に関する専門委員会  
専門委員）

上木 秀 美（えひめこどもの城 事業企画チームリーダー、全国児童厚生員研究協議会 副会長）

大角 玲 子（神戸市総合児童センター（こべっこランド） 運営課長）

阪本真由美（兵庫県立大学 減災復興政策研究科 教授）

白田 好 彦（一般財団法人 児童健全育成推進財団 事業部主任）

富川 万 美（NPO法人 ママプラグ代表理事）



# 非常時における児童館 とりくみハンドブック

～感染症・自然災害時の対応を考える～

---

令和4年3月発行

発行：厚生労働省子ども家庭局子育て支援課

編集：株式会社ダイナックス都市環境研究所

デザイン・DTP：キシ タカユキ、イシノ キヨシ

---